

「非正統派」文化から読み解く古代インド —サットラ行者は若者組か修行集団か—

文学研究科
天野恭子

京都大学職員組合
お昼休みミニ講義（第86回）

2025年11月5日

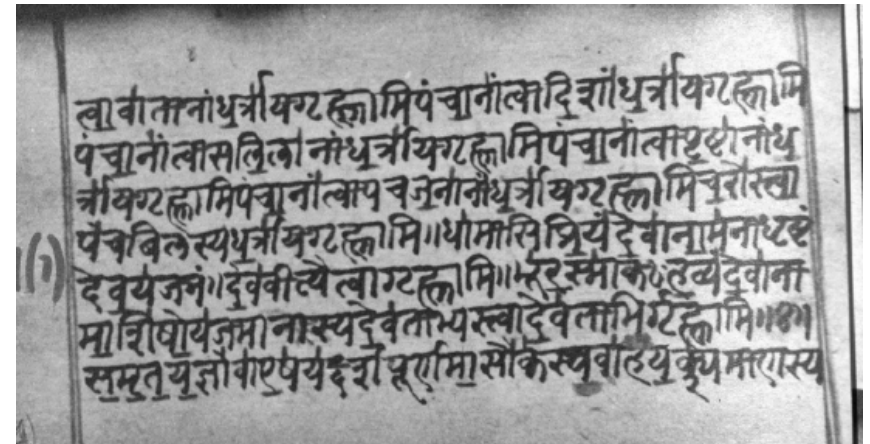


古代インドの歴史とヴェーダ文献

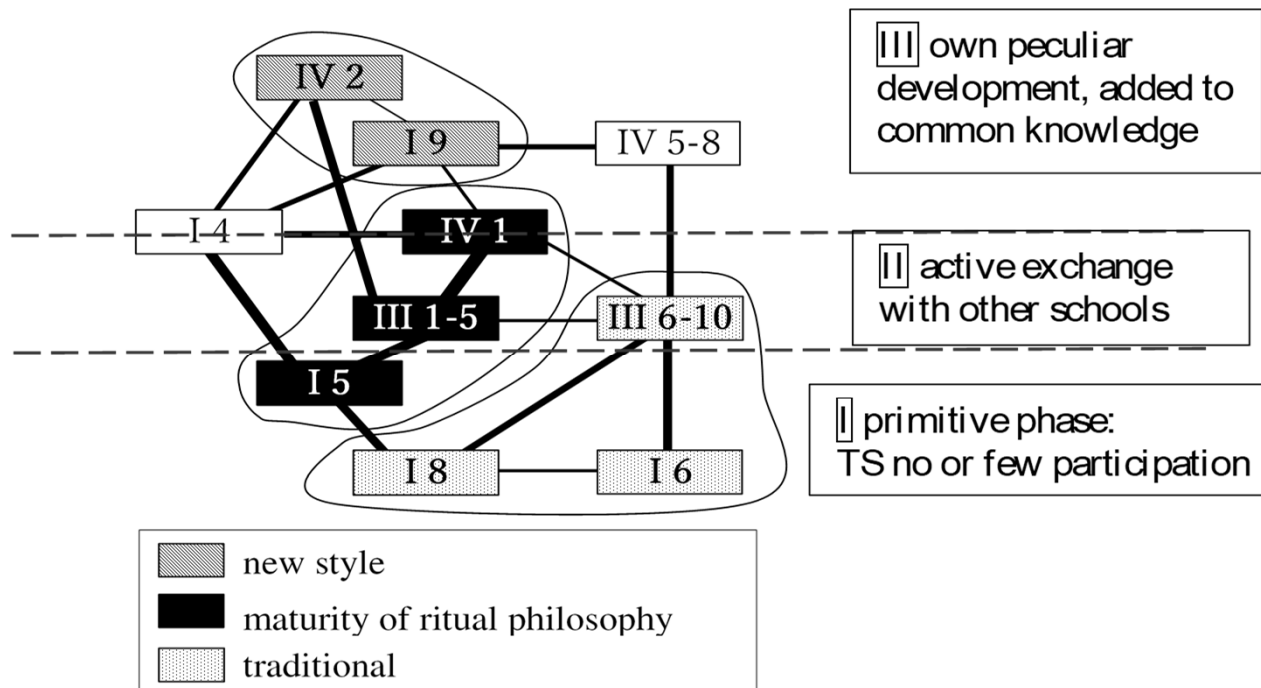
- ・インダス文明(紀元前2600年頃から); 紀元前1900年頃に都市文明が衰退
- ・インド・アーリア人(印欧語族)の侵入(紀元前1500年頃)
- ・「言葉の力」(ブラフマン)を操るバラモンを中心とした自然神や社会慣習の神々への信仰
- ・最古の讃歌集「リグヴェーダ」の編纂(紀元前1200年頃)
- ・神々への讃歌、神話、儀礼の中でとなえる祝詞、儀礼行為の起源や意義の説明、儀礼の意義の議論から発展した哲学など = 数々のヴェーダ文献
- ・ウパニシャッド哲学(ヴェーダに含まれる)は仏教の興隆(紀元前6世紀)と地続き。

マイトラーヤニー・サンヒター(推定紀元前900～700年) 最古の散文 (最古の「説明」)

- ・当時の儀礼(神々を讃え、供物を火に投じることが中心)の所作、起源、意味を最初に説明した文献。
- ・口承による伝承。成立(時期、地理、作者)についての情報がなく、口承の中で自然に出来上がった、という前提で研究されてきた。
- ・しかし、言語や文体の研究から、文献の中の時代層が浮き彫りになる可能性を見出した。



章ごとの言語的特徴をもとに、章をグループ分けする： マイトラーヤニー・サンヒターの成立過程を推測



言語と文体の分析から、ある特徴を有する章のグループが浮き彫りになった。

その章が、内容に関しても、儀礼・思想に特徴を持つことがわかってきた。

マイトラーヤニー・サンヒターという一つの文献の中に、「異文化的要素」が垣間見える！

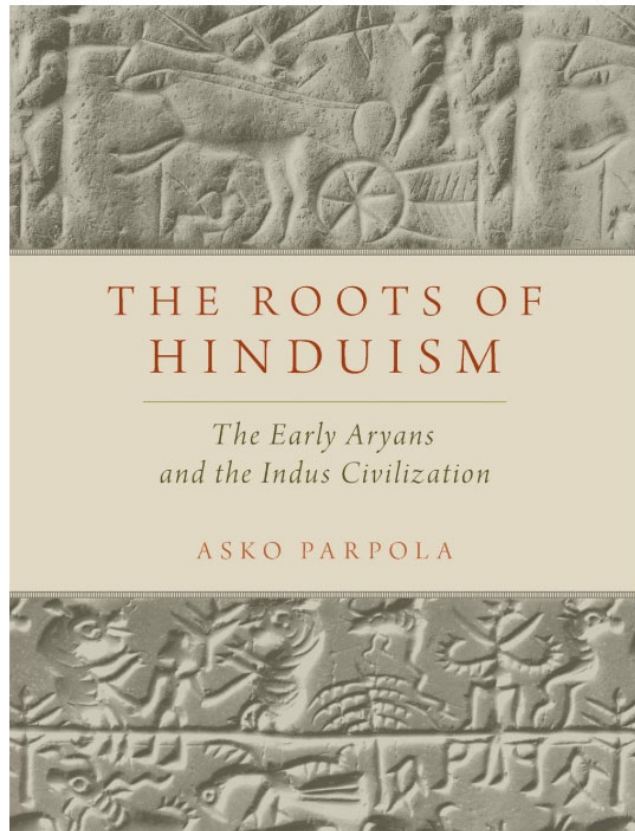
「言語の特徴による層」が実際に社会的背景の違いを反映している

- ・「サットラ」という儀礼に言及している箇所には、特徴的な言葉遣いと、正統派でない儀礼要素が集中して現れる。
- ・「サットラ」は、後の儀礼綱要書（紀元前6世紀以降）で、正統的儀礼であるソーマ祭の、亜種の一つのように扱われている。
しかし、ソーマ祭とは根本的に似ても似つかない儀礼要素が多く含まれる！
- ・他方、儀礼綱要書で、サットラに似た儀礼が、「ヴラーティアと呼ばれる人々を清めて社会の構成員として受け入れる儀礼」として記述されている。

ヴラーティア(サットラ儀礼の担い手)とはどのような人々か？

- ・後の、カーストが確立した文献(『マヌ法典』紀元前2世紀頃)においては、ヴェーダ学習に入門しないがために上位三身分から落ちた人々とされる。
- ・儀礼綱要書(紀元前6世紀頃)に、清めの儀礼をすれば社会の構成員に迎え入れられる、という扱い。サットラはソーマ祭の亜種として規定される。
- ・ヴェーダ儀礼文献(紀元前10～7世紀頃?)では直接言及されることはほとんどない。サットラの記述は散見され、非常に特徴的な文化的要素を示している。
- ・アタルヴァヴェーダ(紀元前11～10世紀頃)では、「ヴラーティア讃歌」という讃歌があり、神のように讃えられている。

The Roots of Hinduism by Asko Parpola



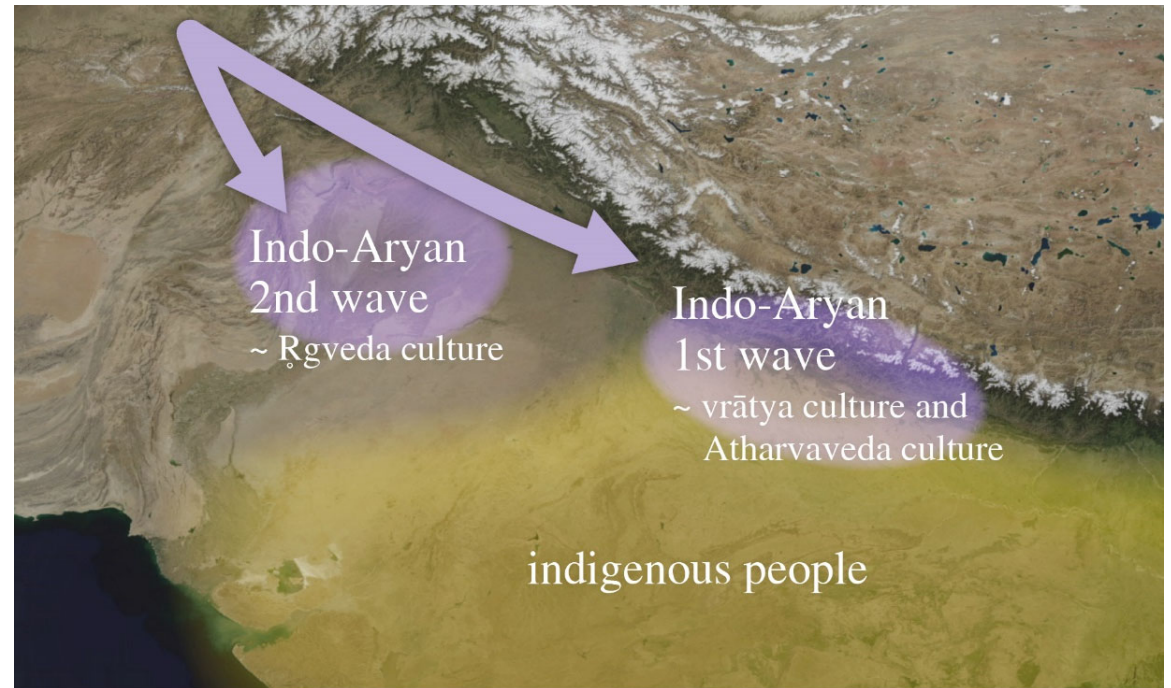
ヒンドゥー教のルーツを、インド・アーリア人がインドに侵入する以前の文化にまで遡って探った。

インド・アーリア人が二波に分かれてインドに侵入していたこと、その第一波がブラーティアと呼ばれる人々にあたり、後のヒンドゥー教の成立に大きな影響を与えた。

The first wave of Indo-Aryan: Parpolaの議論の重要な論点

・インド・アーリア人はfirst waveとsecond waveの二波に分かれてインドに入ってきた。

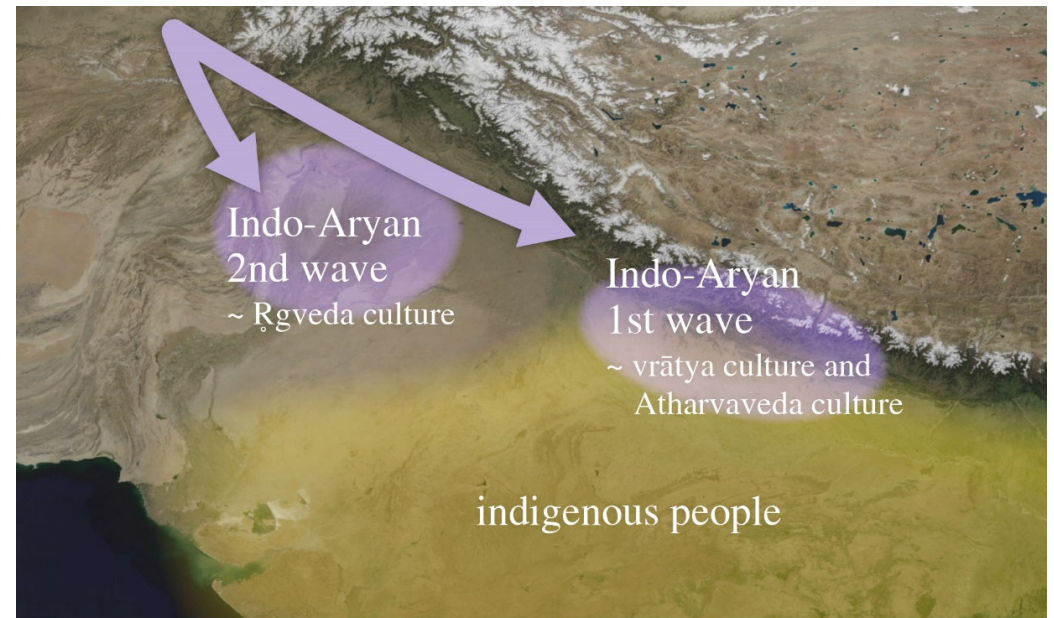
・そのうち、後から来たsecond waveの人々がリグヴェーダを作り、政治的に力を持った(「正統派」)。



The first wave of Indo-Aryan: Parpolaの議論の重要な論点

・先にインドに入っていたfirst waveの人々は、土着(インダス文明の末裔)文化と融合し、独自の宗教・文化を発展させたが、「正統派」によって意図的に薄められ、貶められた。

・しかしfirst waveの文化は完全に影響力を失うことはなく、むしろバラモン文化に取り入れられていった。
これがヒンドゥー教と呼ばれる文化のルーツとなった。



サットラ・ヴラーティア文化の特徴

- ・男性だけの集団で、村から離れて遊動生活を行っている。
- ・暴力的であると恐れられることも。
- ・家畜を連れていて、家畜を増やして帰って来る、という記述も。
- ・特徴的な服装(マント?)
- ・儀礼として記述されるサットラでは、1年間毎日マントラを唱える。
- ・一年を単位とし、一年の最後(冬至あたり)には村に戻るよう。
- ・一年の集団生活の終わりに、締めくくり(打ち上げ含む)の儀礼を行う。

サットラ・ヴラーティア文化の特徴

- ・一年の最後の12日間に、一日一頭の動物を供犠する。
- ・12日目には、(はっきり書かれないが)人間を供犠していたよう。
- ・選ばれた一人が断食する。その人が供犠となるのか。
- ・「自分自身を贈り物にする」という表現がある。
- ・断食する人を選ぶコンテストのようなものが、一年の最初に行われる。
選ばれるのは、最も知恵のある人。(名誉なこと)
- ・強い天界志向(天界に行きたい！今すぐ行きたい！)
 - * ヴェーダの宗教は本来、現世利益を目的とする(「家畜が増えるように」など)
 - ウパニシャッド哲学、仏教(紀元前6世紀頃)に確立する輪廻の思想に影響を与えたか。

サットラ・ヴラーティア文化の特徴

- ・一年の最後の12日間のうち、11日目の晩(人間供犠を行う前の晩)に、「どんちゃん騒ぎ」を行う。
歌、太鼓、ダンス(普通の宗教儀礼ではやらない)
- ・男と女(遊女)の罵り合い(女が勝つ)。
- ・バラモンとシュードラの毛皮の取り合い(シュードラが勝つ)
- ・性交 (→ 後の、タントラ(密教)に繋がる可能性)

その他の特徴

- ・太陽の運行に従い一年を過ごした(春分や夏至に特別な儀礼)
* 当時は普通、星座と月の満ち欠けで暦を測っていた。

社会における若者組文化の意味

- ・日本の若者組、ヨーロッパのギルド制、アフリカやニューギニアの成人儀礼（イニシエーション）

ヴラーティアの持つ性格：

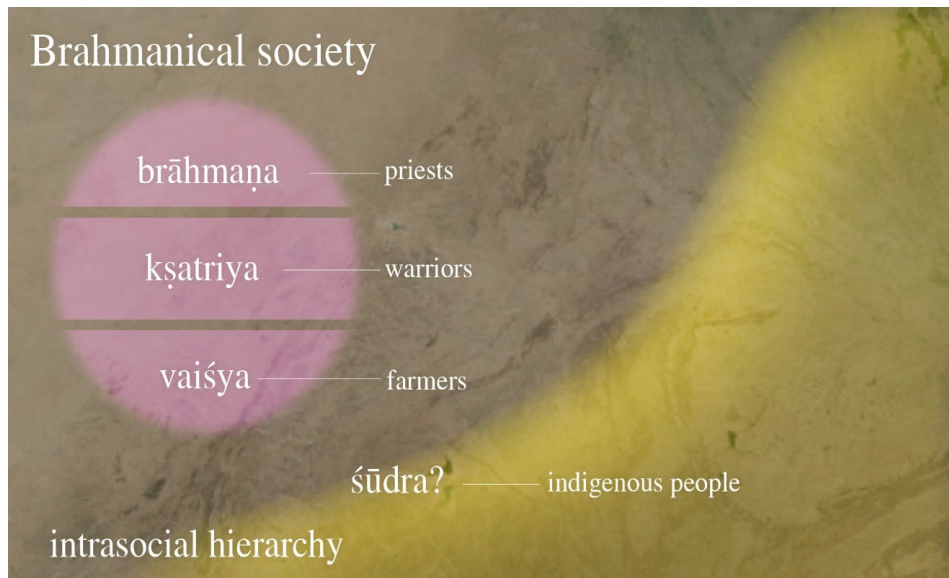
- ・もとは、インドに侵入する時の先遣隊（若い男だけ；武力的）？
- ・大人になる前のイニシエーション？（村から若い男を追い出す目的？；最後に女性をあてがわれている）
- ・集団修行（→ 後の、仏教やヒンドゥー遊行者などの、出家修行文化）
- ・文化・情報の伝播、仲立ち（ネットワーク作り）に貢献した側面もあったか（→ バラモン教、サットラ文化、土着文化の融合からヒンドゥー教が成立）

正統派による周縁化、 研究における周縁化

- ・リグヴェーダ（インド・アーリア人第二波）の人々が、宗教文化の中心を担うようになる。文献の編纂、儀礼伝統の整備と発展、伝統の保持と普及に秀でていたと考えられる。政治権力との結びつきもうまくいったか。
- ・ヴラーティア文化は、定住社会における秩序の整備になじまなかったであろう。不殺生の傾向を強める宗教的な方向性にも合わなかった。
- ・ただし、サットラ儀礼や、修行実践などは、正統なバラモン教に（バラモン教の思想・儀礼の枠組みに合うようにして）取り入れられた。
- ・研究も「正統派」を好む傾向にあったが、近年、異文化的要素に着目した研究や、「正統」を政治的な意図によるものとして読み解く見解も増えてきた。

古代インド社会のdynamismとdiversityを解き明かす

従来のモデル：
社会の中の明確な階級制、インド・アーリア
と土着の完全な分離



新しいモデル：
多様な社会集団がネットワークを作っていた。ヴラーティヤのように、間を行き来した集団・人々もいた。

